

『愛に飢え死ぬ』

ハマグチ

一

冷たい夕風が吹く中、一通の手紙を胸に抱きながら彼女は海を見ていた。その手紙には『久しぶり』『貴女と話がしたい』といった旨が達筆で書かれた一枚と稚拙な字で書かれたいくらかのラブレターが封されていた。差出人の氏名。名字は珍しいものだが彼女には見覚えがない。名前の方はありふれたものだ。子供の頃のお姉さんも、中学生時代の隣のクラスの子ども、テレビに出ている有名人でも何人か、その名前をしていた。差出人の住所は東京、彼女の居る島からは随分と遠くから届いたものである。

決心した彼女の行動は早かった。夜に東京までの行き方を調べ、いつもは眠くなるまで読んでいる本も読まずに眠りに就き、次の日の朝早くには出発した。

彼女は船の甲板で長い髪をなびかせながら離れていく島を見ていた。少しずつ暖かくなっているとはいえ海の上で春風はまだまだ彼女の体を苛んだ。それでも彼女は船の中には入らず物思いに耽っている。島の桜は、毎年満開の綺麗な花を咲かせ、彼女のお気に入りだった。小さくなつていく薄ピンクの風景が彼女を見送っているようだった。

船はゆつくりと、波に乗りながら進んで行く。周りの風景は海と空の青や島の木々の緑ばかり、海鳥が上空を飛んでいく。彼女は中に入り今後の予定を反芻する。久しぶりの遠出なのだ、何度確認をしても不安は残る。そうしているうちに陸地が見えてきた。揺れる船に足をもたつかせながらも船員に手を取ってもらい船を降りた。まずは新幹線の駅を目指さなければならぬ。バスに乗り、新幹線が通る大きな駅へと行く。

新幹線に乗るのも久しぶりなので、彼女は窓口で丁寧に説明し乗車券を買った。受け取った乗車券に明記された席に座り、先程購入した駅弁を広げる。朝は急いでいて朝食を摂っていない。かっただ彼女の今日初めの養分摂取だ。

新幹線は静かに乗客たちを運んで行く。彼女は窓の外を見ながら手持無沙汰に左の人差指に付けた凝ったデザインの指輪を右手で弄っている。窓の外の景色は山の中、まっすぐに伸びた杉の木が生い茂っている。彼女が眺めていると不意に景色が暗転する、トンネルに入ったのだ。暗い壁に囲まれ、新幹線の走る音が反響する。長いトンネルで抜けた頃には景色は一変していた。周りには高いビルが生い茂っている殺風景なものだった。

く初心な雛鳥、籠の恋く

桜の木の下で待っている貴方に向かって小さく手を振る。貴方と居ると心臓がトクトクと早鐘を打つ。伝えたい気持ちもあるけれど、その気持ちはまだまだ秘めたまま。

二

僕はこの大きな駅の改札で新幹線を待つていた。僕が新幹線に乗りたいわけじゃない。新幹線に乗るのならホームで待たなきゃいけないということは知ってるぞ僕は。此処で女性が来るのを待つてというのが僕の使命なだけだ。都会というのは時間帯に限らず人が多く、僕はこの人の多さだけで辟易してしまう。首を吊るように頭をもたげながら歩くサラリーマン。何も考えずてなさそうな若者。化粧で顔を造り上げた女。待ち合わせの時間つぶしの会話で騒音を助長する集団。そんな様々な人種が様々にベクトルを向けて、自由に闊歩している。周りにこれだけの人が居ながら、そんなことは歯牙にもかけず個人の空間にのみ埋没している。僕だつてそうだ。他人のことなんてどうでもいい。

柱に寄りかかりながら、不意に、此処に数時間も居なければならぬかもしれないという考えがよぎる。なんとということだろう、こんなことなら引き受けなければよかった。しかも、別に僕は彼女と待ち合わせをしているわけではない。この人の多さでは見逃してしまうのではないか、もしかしたらもう見逃して彼女は別の所に行つてしまつていてはならないか、そんな風に考えたら余計に気が滅入つてきた。分かつていたこととはいえ、家を出てくるときはそんなに重大なことだとは思つてなかつた。断るのに理由を作るのが面倒臭いからといって短絡的に引き受けてしまったことに後悔が募るが、そんなこと言つてもしょうがない。

さて、次の新幹線が来た。僕は暇つぶしに読んでいた本（内容なんかまともに頭に入っていないけど）を閉じると、目を凝らし周りを見渡す。意外なことにすぐに見つかった。実際に会ったことはないが顔は知っている、写真で見せられた通りだ。都会の人の多さに慣れないのか、彼女はその波に乗れずに、ぶつかり押しのけられ、よたよたと歩いてくる。電車にもほとんど乗ったことがないのか、改札を抜けるにも一苦労のようだ。改札を出ると彼女は大きく一つ溜息を吐いた。

「こんにちは」

僕は彼女に挨拶をする。突然僕に話しかけられ、彼女は驚き、そして当惑の表情を見せる。当然の反応だった、彼女は僕のことなんて知らないのだから。当然の反応をしてくれると僕の方も当然に対応すればいいだけだから楽だ。身分証明として僕の生徒証を提示し、名前だけの自己紹介をする。彼女が読んだであろう、此処に来るきっかけとなったであろう手紙の差出人と同じ名字であることを確認してもらう。珍しい名字ではあるが信憑性はあるだろうか。彼女は信じるかどうかは定かではない。学生証を見てから僕の顔を見る。少し間をおいてコクコクと頷きながら僕の名前を小さく口に出すと学生証を僕に返した。

「貴女を迎えに来た者です。頼まれただけですけどね。まあ僕としてもこんなに人の多い中で貴女と会えるとは思っていませんでした。奇跡といってもいい。ここまでくると運命づけられていたとも考えられますね。もしかしたらただの偶然かもしれないし、僕が此処にいるのも

貴女が此処に來たのも至つて恣意的ですから必然とも考えられますけど。しかしどうでもいいことですね。奇跡だろうと運命だろうと偶然だろうと必然だろうと、重要なのは僕と貴女は出会つたという事実であり、過程にどんな名前を付けようと結果は変わらないのですから。奇跡はメンヘラが、運命は詐欺師が、偶然は衆愚が、必然は頭の足りないガリ勉君が使う言葉です。結果の絶対性より過程を美しく飾ろうなんて、人の悪い癖ですよ。補足、物が地面に落ちるのは奇跡でも運命でも偶然でも必然でもなく、ただの摂理ですね」

彼女はポカーンと僕の方を見て、話を聞いているのかいないのか、突つ立つたままだつた。「まあこんな話もどうでもいいんですけどね。行きましようか、それともその辺を観光としますか？ もっと待つかと思つてましたし時間には多少なら余裕がありますけど。あの自然豊かな島から來たのなら都会の汚い風景でもいろいろ見たら楽しいんじゃないですか」

彼女はかぶりを振つた。このまま目的地まで連れていくだけでいいらしい。良かった、僕は思つた。ただの社交辞令を本気にされては面倒だし、そもそも僕はこんな人が多くて空気が汚い所なんて早く離れたいのだ。こんな所に居続けたら喉がイガイガしてくるじゃないか。

「じゃあ行きましようか。船やら新幹線やらでお疲れでしょうが此処からまた電車に乗り換えしてもらいます。電車に乗つてからも結構かかつてしまうのですが我慢してください。…ああ、こつちです。ついて来て下さい」

女性というのはこんなにも歩くのが遅いのだろうか、ペースを合わせるのが大変だ。そうい

えば、もう死んでしまったが、祖父は僕よりずっと歩くのが速かった。生前よく一緒に散歩したが、祖父は僕にペースを合わせてくれることはなく、ついて行くのがやっとだった。その所為だろうか僕は周りの人よりも歩くのが少々速いらしい。彼女は改札から出で来るときと同じくよたよたと周りを気にしながら歩いている。しようがないので彼女の手を引いてやる。他人の体温というのは実に不愉快だが、しかしこうしないと日が暮れてしまいそうだ。

五分以上かかって私鉄の駅に移動した。

「違います。その駅でまた乗り換えですがただの支線ですから切符は一枚で行けます。目的地までの切符を買ってください。ほらそこ、分かれたところから七つ目の駅まで行きます。しめて三百八十円ですわね」

きちんと調べてきたのだろう、彼女は目的の駅は把握していた。しかし如何せん電車というものシステムをあまり理解していないのだろう、乗り換えの度に駅を出て清算しなければならぬと思っていたらしい。切符を買う仕事もたどどしいものだ。よく此処まで来られたな、まあ駅員は仕事熱心な人が多いのだろう。僕が初めて一人で新幹線で遠出したことを思い出した。窓口で懇切丁寧に料金やら行き方を教えてもらった。だいぶ昔のことだ、懐かしい。

この時間の下り電車は空いていた。二・三時間もすれば帰宅ラッシュが始まる。ホームが人で埋め尽くされているあの光景は、まるで蠢く蟲共を見ているようで、いつでも僕をゾツとさせた。空席は多く、困らずに座ることができた。別に僕のことを何か話す必要は無かったのだ

が、彼女は僕のことを知りたいようだ。当然か、見ず知らずの得体の知れない人間と同じ時間を共有しているのは心地よいものではないだろうし。

「僕の名前は先ほど紹介したとおりです。性別は男。歳は十六、高校生です。今は春休みですね。この時期って学年は進級前か後かどちらを言えばいいか判然としませんよね。普段は両親と暮らしていますが、今、春休み中は祖母の家に下宿しています。血液型はA。確か日本人に一番多い型でしたっけ。血液型を気にするのは日本人だけらしいですけど、僕も貴女も日本人ですので例に沿って紹介しておきましょうか。僕は血液型占いとかは信じませんがこのように話題にはなりますから良いツールですよ。趣味は読書。好きな作家は夢野久作。『ドグラ・マグラ』が有名ですが、僕は『死後の恋』の方が好きですね。オチが実に滑稽だと思うんですよ。どう思います? ……え、読んだことは無いのですか。角川さんの、えつと確か『瓶詰の地獄』に収録されてたと思います。短編なんですぐ読めますよ。お気に召すかは知りませんが無口なほうでして、しゃべるのはあまり得意ではありません。このような場で何を話せばいいのか分からないですよ。お恥ずかしい話、会話が長続きした経験があまりありませんね。色々話してみたいことは有るんですが相手が興味を持つのか心配になつてしまふんですよ。僕をつまらない話をしゃべってもいいんだらうかって。そもそも話題が無いってこともありませんが、クラスメートとも共通の話題があまり無いんですよ。友人も多からず居ますが聞き手にまわるほうが多いですね。特技などは特にありませんね。至って平凡な人間です、平凡な人

間の見本といってもいい。家族構成は、父方も母方も祖父は亡くなりましたが祖母は両方健在です。そういうえば家族の定義も曖昧ですよ、紹介する時も困るんですよ、”何人家族です”なんて。親族に依る共同生活の単位つてことでしようがどこまでの範囲を言えばいいのか。ちなみに僕の名字は父方の祖父の系列ですね。両親は時々喧嘩もしてますが仲睦まじくしています。兄弟姉妹共に居ません。思春期特有の感情かもしれませんが、そもそも僕は僕の親だけに限らず親といったものが好きではないんです。……話は多少逸れていますが、時間はありますし聞いていただきたい。例えばですね、感動ストーリーなんかで慣用句的に『アナタが生まれてきてくれて本当に幸せだよ』なんて使われるでしょ。まあここまで直截的でないでしょうけど。観ますか映画とか？ 観ませんか、そうですね。僕も大概観ませんけどね。嫌いではないんですが一本観るのにかなり時間を使ってしまうから。最近の映画つて大げさなのが多くありません？ SFXとかいうんでしたっけ、VFXでしたっけ。聞きかじった程度でよく知りませんでした、調べもせずにしゃべりました。まあCG技術つてすごいなつてことですね。しまった、今してるのは映画の話ではありませんでした。なんでしたっけ、……ああ親子間で幸せは遺伝するのかなの話をしたかったです。子供が生まれた時、親つていうのはとても幸せなんだろうなって思いますよ。例外はありますけどね、現に親からの一方的な虐待を受けている子だつていますし。『隣の家の少女』みたいな話もありますしね。ああ、あの小説は実の親子ではありませんでしたか。しかしあれ実話を基にしているらしいですよ、凄惨

な話です。まあ、例外の話は今回はしません、重大な問題ですがね。親は子供を生んで幸せだと思ふ、子育ては大変らしいですが。しかしね、子供の方はどうなんでしょう。勝手に断りもなくこの世に誕生させられて、幸せになれるかどうかともわからない人生を自己責任で送らされるんですよ。迷惑な話ですよ。現に僕は生まれてこのかた一度たりとも幸せと感じたことはありません。おかげで不幸も感じずに生きてこられましたかね。未来に期待も希望も展望も無いですし、もう夢を語る歳でもありません。しかも現実を見るにはまだまだ人生経験が足りません。そのくせ社会情勢っていうものは否が応でも自分の生活に影響してくるんですよ。嫌な時代なんですから嫌にもなりますよ。僕はそもそも人生に、いや世界に興味なんて無いって考えているんですよ。じゃあ生きてたつてしょうがないじゃないですか、なんで生まれてきたんだらうつて。そういう人つて多いんじゃないですか。明日、世界が無くなったつて誰が困るつていうんですか」

彼女は興味は無さそうに僕の話の話を聞いている。いや、聞き流している。そうだろう、僕だつて本気で言っている訳じゃない。こんなこと言つたつて僕は生きてるし世界は存在し続ける。どうあつても大人になる。それが変わるわけじゃない。人生は劇的じゃない。劇薬じみた面白さも無い。劇化してくれる人も居ない。劇詩のような美しさすら無い。素晴らしい劇場だつて無い。人生は決して物語ではないのだ。誰もが主役どころか脇役ですらない。…なんて感傷的になつてみたが、そもそも自己紹介が目的だったのに下らない話をしてしまった。まあいいか。

そんなことをしているうちに駅に着いた。僕は立ち上がり、

「乗り換えですね、行きましようか」と彼女を促した。

く左の薬指を根元から切り落とすく

触レタ彼ノ体温ハ、ゾットスルホド熱ク感ジタ。触レタ手が火傷シテシマウカト思ウホドニ。見降ロスト、少年ノ空虚ナ目ガコツチヲ見テイタ。昏イ昏イソノ目ニ吸イ込マレテシマウカノヨウダツタ。